

人間社会学部

試験問題冊子

(B日程 2月20日)

国語

注 意

- ① 試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開かないこと。
- ② 問題冊子に落丁、乱丁があった場合は、試験監督者に申し出ること。
- ③ 試験監督者が試験開始の指示をしたら、ただちに解答用紙の所定欄に、受験番号を記入し、マークすること。
- ④ 解答は全て解答用紙に記入すること。
- ⑤ マーク式解答欄および裏面の記述式解答欄の指定された箇所以外は使用しないこと。
- ⑥ 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

注意 解答はすべて各問の下端の 内に指示された解答欄にマークまたは記入すること。なお、解答欄のうち、この試験で使うのは、マーク式解答欄の 1 ～ 14、記述式解答欄の A ～ J のみである。

問題一 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

暗闇ほど人間を怖がらせるものはあまりない。人類は太古の昔から、ずっと暗闇を恐れてきた。両親が明かりを消した後のベッドルームの暗さ。かがり火の周りで怪談を聞くときのあたりの暗さ。鬱蒼とした森の太古の昔を思わせる暗さ。真つ暗な自宅に帰ってきて、誰もいないのかと思いつながら足を踏み出すときの暗さ。

暗闇は、根源的で、実存的な恐怖だ。人間が怖いと感じる要素を、すべて持っている。本物の恐怖も、想像の中の恐怖も、実際の人生から生まれ、物語の人生から生まれ、文化やおとぎ話から生まれる。

暗闇の中にいる時間が長くなるほど、恐怖も大きくなる。獐猛な肉食動物がいるかもしれない。高いところから落ちて大怪我をするかもしれないし、何かで体を切って血が出るかもしれない。強盗に襲われるかもしれないし、暴漢や殺人鬼が潜んでいるかもしれない。実在しない想像上の怪物でも、恐ろしさは変わらない。悪霊、幽霊、ゾンビ……。暗闇は、未知のものの象徴だ。そして、この「未知」ということほど、私たち人間を怖がらせるものはない。見えないところに何がいるのかわからない。安全なのか危険なのかわからない。生き残れるのか死ぬのかわからない。心臓が早鐘のように打ち、目はあたりをきよろきよろ見回す。アドレナリンが体内を駆けめぐる。

「知らない、わからない」という状態は、ずっと人類を苦しめてきた。その原因を理解するには、まず時代をさかのぼり、「知らないものが怖い」という感情が人類の生存とどう関わってきたかを見る必要がある。

200万年前の地球を想像してみよう。東アフリカで人類の祖先が誕生したところだ。大きな地殻変動が起こり、かつては森が広がる平地だった東アフリカが、険しい山が連なる乾燥地帯に変貌した。水も食料も少なく、生き残るには厳しい環境だ。

その結果、私たちの祖先は木から地面に降りて、二足歩行の生活を始めた。彼ら以外にもヒト科の動物は存在し、過酷な環境の中で生存競争をくり広げながら進化していった。

当時の地球には、今よりもずっと大きいカバ、それと同じくらい大きい野生のブタ、獐猛なハイエナなど、危険な動物がたくさんいた。そして、過酷な生存競争を勝ち抜き、ヒト科の中で唯一生き残ったのが、私たち人類だった。

私たちは、このような環境の中で進化してきた。私たちの脳と知覚も、同じ環境で進化した。太古の地球は、きわめて不安定な環境であり、まさに一寸先は闇だ。そして私たちの祖先は、住む家や食べ物を見つける方法も、病気や怪我を治す方法もほとんど知らなかった。

当時の人類は、まだ、「a」にはなっていなかった（とはいえ、現代も真の王者は人類ではなく、私たちが滅びてもずっと生き残るバクテリアやゴキブリだろう）。薬

はなく、薬で治すという発想すらなかったので、単純な病気でも命取りだった。世界は厳しく、予測できない場所だった。そして暗闇こそが、恐ろしい「未知」の象徴だった。このような環境では、未来を予測できないことは、そのまま死に直結する。近くの水がある場所を予測できない、食べられる植物と食べられない植物を予測できない。向こうに見える「影」が肉食動物だと予測できない——こうなってしまったら、すでに手遅れだ。

確実性は生存を意味し、不確実性は死を意味する。

「b」ことは、「死ぬ」ことだった。

進化の歴史を通じて、生きることとは死ぬことより難しかった。実際のところ、死なない方法よりも、死ぬ方法のほうがずっとたくさんあったのだ。雨露³をしのげる場所にいて、仲間に囲まれ、とりあえずすべてが予測可能な環境にいるときに、あなたがもつとも恐れている事態は「あれ、向こうに見えるのは何だろう？」という言葉を聞くことだ。その瞬間、死ぬ確率が一気に跳ね上がる。

とはいえ、個人とcとでは状況が異なる。誰も気づかないことに気づく「変わった人」がいるおかげで、種族全体が生き残る確率は高くなるのだ。私たちは、彼らのような「病的なタイプ」に感謝しなければならない。普通の人、平均からイツダツ⁴していない人から見れば彼らは変人だが、彼らのおかげで危険を回避したり、新しい生き残り術を発見したりできる。

人類にかぎらず、魚でもそれは同じだ。群れから離れて食べ物を見つける魚は、真つ先に他の魚のエサになる魚でもある。しかしその魚のおかげで、群れは新しい食べ物を手に入れることができる——たとえ当の本人は食べられてしまったとしても。

つねに変化する世界で暮らす私たちには、dのような多様性のある集団が必要だ。誰でも知っているように、システム全体が進化するには、多様性が欠かせない。人工生命システムの進化に関する私たちの研究でも、多様性のある集団は、そうでない集団に比べ、最適の解決策を見つける可能性が高くなるということがわかつている。

加えて、多様性のある集団は、不確実な環境で進化するときに、より環境に合わせた行動をとるということもわかった。それに、ニューロンの働きもより複雑だ。たとえば、人工「モウマク」⁵の中に多様な受容体をつくり出している。これは、色を知覚するために必要な機能だ。これらの発見は、環境に合わせた行動と進化は、不確実性から生まれるという考え方と一致している。

無意味に見えるデータから役に立つ予測をして、不確実な環境を生き残ることは、おそらく脳にとつてもっとも大切な仕事と言えるだろう。だからこそ、私たちの脳は、不確実な環境を避けることを目的に進化してきた。

生きているものはい、不確実性を嫌う。その証拠に、暗闇への恐怖は、人類だけでなく、他の類人猿にも共通している。

ここで言う「暗闇」とは、文字通りの暗闇だけではない。「未知である」という意味での暗闇も含まれる。

私たちとは対照的に、ネズミは暗闇ではなく光を恐れるが、恐れる理由は同じだ。ネズミは夜行性なので、暗いほうが敵に見つかる心配もなく、安心できる。ネズミにとつては、暗闇ではなく光が「不確実性」の象徴なのだ。

つまり、すべての生きているシステムは（個別であっても、集団であっても）、独自の「暗闇」を持ち、それを避けるために進化してきたということだ。

不確実性を避けるのは生き物にとっての本能であり、一方で、その恐怖心が、創造性の妨げになることもある。

（ボー・ロット 桜田直美訳『脳は「ものの見方」で進化する』より一部改変）

問1 傍線部1、2、3の漢字のよみをひらがなで、傍線部4、5のカタカナを漢字に直して、それぞれ記述式解答欄に記入しなさい。

1

A

 2

B

 3

C

 4

D

 5

E

問2 傍線部ア「私たちの脳と知覚も、同じ環境で進化した」の意味として最も当てはまらないものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

1

- ① 森が広がる平地の中で私たちの脳と知覚は進化した。
- ② 過酷な生存競争を強いられる環境の中で私たちの脳と知覚は進化した。
- ③ さわめて不安定な環境の中で私たちの脳と知覚は進化した。
- ④ 危険な動物が多く存在する環境の中で私たちの脳と知覚は進化した。

問3 空欄

a

、

c

 に当てはまる語の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

2

- ① a 地上の勇者 c 社会全体
- ② a 地球の王者 c 種族全体
- ③ a 世界の覇者 c 組織全体
- ④ a 未来の英雄 c 世界全体

問4 空欄

b

 に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

3

- ① 面白くない
- ② 怖がらない
- ③ 知らない
- ④ わからない

問5 空欄

d

 に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

4

- ① システムエンジニア
- ② 農耕民族
- ③ 回遊魚の群
- ④ オークストラ

問6 傍線部イ「システム全体が進化するには、多様性が欠かせない」の意味として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

5

① 誰も気づかないことに気づく「変わった人」の存在がシステム全体にとって重要になる。

② 常に最適の解決策を見つけ続けなくても、システム全体は進化できる。

③ 環境に合わせて行動しなければ、システム全体は進化できなくなってしまう。

④ 不確実な環境を避けることで、システム全体に多様性がうまれる。

問7 傍線部ウ「生きているものはいいてい、不確実性を嫌う」の意味として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

6

① 集団で生きる人類は「暗闇」を恐れている。

② 全ての生き物は危険を予測する「本能」が備わっている。

③ 全ての生き物は「未知なるものへの恐怖心」に従って行動する。

④ 私たちには「暗闇」ではなく、「光」を求める性質がある。

問8 本文内容に最も合致するものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

7

① 世界は常に予測のできない場所であり、暗闇こそが、恐ろしい「未知」の象徴である。

② 「未知」ということほど、私たち人間を怖がらせるものはないが、その恐怖心が、新たな創造性の妨げになることもある。

③ 無意味に見えるデータから役立つ予測をして、不確実な環境に適応する進化は、脳にとっては最も難しい仕事である。

④ 多様性のある集団は、そうでない集団に比べ、最適の解決策を見つける可能性が低くなるということがわかっている。

問題二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

「国難」とか「未曾有¹の危機」といわれている今の日本。大震災や景気低迷、円高などの事象を見ると、逆境にあることには間違いがない。ニュースでは連日「問題が山積」といつている。世界のなかでも突出して日本が悪い状態にあるような気になる。しかし、本当にそうだろうか。

まず確認したいのは、日本の歴史を通じて「問題が山積」していなかったときはない、という当たり前の事実だ。昔の新聞を読み返してみればわかるのだが、「問題が山積」と書いていない日はない。少なくとも人々の認知においては、常に問題は「山積」している。

しかも、あらゆることが絡み合っているのが人の世。ある問題の解決は必ずといってよいほど新しい問題を生み出す。たとえば、敗戦後の戦後復興（それこそ問題がエベレスト級に山積していた）を目指した工業化は、高度成長期になると公害の問題を引き起こした。

ようするに社会^アの問題が完全に「解決」されることなどあり得ない。常に問題がある。だからといってそれをほっといていいわけではない。何とか解決しようとする（公害問題などは日本がわりと底力を発揮した例である）。しかし、問題は次から次と押し寄せてくる。問題解決の自転車操業、これが人の世のシク²クメイだ。

この話は a にも拡張できる。「問題はいつも山積している」は日本以外のあらゆる国にもそのまま当てはまる。アメリカも財政赤字やら国際紛争、医療における制度改革など、挙げていけばきりがないほどいろいろな問題を抱えている。中国などの新興国だって、景気が良さそうに見えて、政治・経済・社会情勢の面で不安定な要素をたくさん抱えている。

EU諸国も大変だ。ギリシャを始め、ポルトガル、イタリア、スペインなど財政状況が悪い国がたくさんあり、「問題は山積」である。あちらの問題が落ち着いたと思えば、こちらから新たな問題が噴出するという事態で、財政再建策もなかなかまとまらず、将来がどうなるのか非常に不安的な状況が続いている。「問題が山積していない国、手を挙げて！」と聞いて、「ハーイ！」と元気に手を挙げられる国はほとんどないだろう。

こうした国々に比べて、なお日本が最悪といえるだろうか。僕にはそうは思えない。むしろ恵まれているところがあるとさえ思っている。というのは、問題の不確実性が、中国やEUと比べると相対的に低いからだ。問題が「安定している」とか「見通しがきく」といつてもよい。

たとえば、ずいぶん前から騒がれている少子高齢化。少子化と高齢化が同時に進行し、労働人口が減少し、社会保障費が増加していくことが問題だとされている。これだって、すぐにパニックが起るようなものではない。30年以上先の人口予測が出ていて、今後人口がどう推移していくのか、社会保障費がどれくらい足りないのかがほぼ確実にわかっている。

そうになると、今からどんな対策を打っていくべきかも、だいたい決まってくる。消費税を上げるとか、社会保障と税の一体改革をするとか、一票の格差を是正するとか、やるべきことはかなり前から大体のところはわかっている。

ではなぜなかなか問題が解決されないのか。やるべきことはわかっているけれども、世の中の利害が複雑に絡み合っているので、合意が形成できない。必ず文句をいうやつが出てくる。合意が形成できないので、国のレベルでは実行に踏み出せない。ようするに問題の「複雑性」が解決を困難にしているわけだ。

国が抱える問題を「複雑性」と「不確実性」で分けて考えれば、本質は見えてくる。日本の場合、問題の複雑性は高いが、将来どのような状況になっていくのか、予測がつく問題が多い。不確実性はそう高くない。これに対して、これを書いている時点でのEUは、複雑性のみならず、不確実性も高いレベルにある。

複雑性と不確実性、どちらも厄介ではあるが、bのほうがまだましだというのが僕の考えだ。cは何が起るかわからないから怖い。原発事故があれほどシリアスな問題になったのは、それが複雑のみならず極めて高い不確実性を多く含んでいた（いる）からだろう。

社会を統治する仕組み（ガバナンス・メカニズム）には「市場」と「組織」がある。市場が相対的に得意なのはdに対応すること。一方の組織による統治は、国のレベルでは政治（政治的な意思決定と行政組織による政策の執行）に該当する。政治はそもそもeに対処することとその使命がある。つまり日本が現在、複雑だけれども相対的に安定している問題を抱えた国だとすると、まさに政治が力を発揮できる、発揮すべきときだといえる。

ほとんどのまともな政治家は（もちろん、いつの時代も「まともな政治家」は少数派なのだが）、そのことを理解している。何をやればいいかもわかっている。ただし、それだけでは社会的合意は形成できない。議論が沸騰したTPPがよい例だ。輸出企業の経営者は賛成する。反対に農業団体は反対する。ことの性質からして、これは当たり前前の話だ。全体主義国家じゃあるまいし、自然と合意が形成されるわけがない。じゃあ議論しましょうということになるのだが、双方の言い分を聞いているだけではいつまでたっても話がまとまるわけがない。そこでfが必要になる。

ここで大切なのは政治がきちんとメッセージを発することだ。しかもそのメッセージは骨太の「ストーリー」になつていなければならない。世の中の人々はそれぞれがなにかやかと忙しく生活しているので、自分の利害に直接響かなければ、複雑な物事の詳細まで理解しようという人は少ない。だからこそ平明な、ただし「郵政民営化！」といった「ワンフレーズ」ではないストーリーが社会で共有されなければならない。ストーリーこそが合意形成のドライバーになる。

「日本は複雑な問題を抱えて大変だ。だが、そう不確実でもない。問題の正体はわかっているし、何をすればいいのかも決まっている。ついては、こういう段取りでこういう順番でこういう風に問題を片づけていく。この先、この段階ではこういう立場にある人々には苦しい状況になる。しかしその先にはこういう未来が開けているのだからついてきてほしい」という強いストーリーをまず政治家が示さなければならない。それを受け入れる程度には日本国民は成熟しているはずだ。

ところが、政治家からはこの種のストーリーがさっぱり聞こえてこない。個別の問題について、国民と一緒にあってブーブー言っている。非常に悪い意味で「生活者の視点」に立ちすぎていると思う。首相には、骨太で平明なストーリーをつくるという仕事

に、すべてに優先して取り組んでいただきたい。あらゆる機会をとらえて、言葉と体のすべてを総動員して、そのストーリーを堂々と国民に伝えてほしい。スーパーマンでなくとも、未来に向けたストーリーをつくれる程度に問題が安定しているということが日本の強みなのだから。

トップに立つものが未来に向けたストーリーを語るべきだということは、企業でも同じだ。物事には悪い面もあれば良い面もある。一見、悪いように見えても、他と比較すると良い面、恵まれている面も必ずあるものだ。たとえば円高は輸出企業にとっては逆風だが、海外の企業を買収したり、海外に進出したりするチャンスでもある。

日本はビジネスにとって逆境先進国だ。これまでの日本の歴史を見れば、逆境に耐え、克服する力は十分にあるはずだ。g³、これまでも逆境に立ち向かうことで、日本の企業の能力は鍊成³されてきた。「逆境なら任せておけ！」（経営学者、藤本隆宏さんの名フレーズ）、ここに日本のホンリヨウ⁴がある。

企業は逆境を正面から受け止め、人のせいにはしないことだ。どっちにしろ問題は常に山積しているもの、と割り切ったほうがいい。「六重苦」とか嘆いても仕方がない。気持ちはわかるが、嘆くだけならだれでもできる。ここはまず問題の本質を直視して腰を据えて戦略ストーリーをつくる。それをステイクホルダー（従業員や顧客、投資家）にいやというほど繰り返し発信する。それが経営者の仕事のはずだ。

確かにこのところの政治や行政はどうしようもない最低水準で推移してきた。しかし、政治がダメでも企業ははるかに自由に動ける。政治に依存して企業がよくなったためはない。日本の経営者、企業人は自らの力で逆境を踏み越えるキガイ⁵を示し、政治に「ほら、こうやったらできるだろ！」という手本を見せつけてほしい。

（楠木建『経営センスの論理』より一部改変）

出題者注…TPP（協定） 環太平洋パートナーシップ協定

問1 傍線部1、3の漢字のよみをひらがなで、傍線部2、4、5のカタカナを漢字に直して、それぞれ記述式解答欄に記入しなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">F</div> | 2 | <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">G</div> | 3 | <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">H</div> | 4 | <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">I</div> | 5 | <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">J</div> |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|

問2 傍線部ア「社会の問題が完全に「解決」されることなどあり得ない」の理由として最も適当でないものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 日本の歴史上、「問題が山積」していなかったときはなかったから
- ② 問題は次から次と押し寄せ、自転車操業状態であるから
- ③ 問題に対して解決しようと試みてもうまくいかないから
- ④ ある問題の解決策がまた新たな問題を発生させるから

8

問3 空欄 a に当てはまるものとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

9

- ① 時間的
- ② 累積的
- ③ 空間的
- ④ 普遍的

問4 空欄 b、c、d、e に当てはまるものの組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

10

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ① | b | 複雑性 | c | 不確実性 | d | 不確実性 | e | 複雑性 |
| ② | b | 不確実性 | c | 複雑性 | d | 不確実性 | e | 複雑性 |
| ③ | b | 複雑性 | c | 不確実性 | d | 複雑性 | e | 不確実性 |
| ④ | b | 不確実性 | c | 複雑性 | d | 複雑性 | e | 不確実性 |

問5 空欄 f に当てはまるものとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

11

- ① 問題解決
- ② 政治決断
- ③ 合意形成
- ④ 全体主義

問6 傍線部イ「生活者の視点」に立ちすぎている」とあるが、その意味する内容として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

12

- ① 生活者の日々の問題解決に向けたストーリーを行き過ぎたものになっている。
- ② 個別の問題に対して国民よりも生活者のものの見方になってしまっている。
- ③ 日常の問題に不満を述べるだけで将来に向けたメッセージを発していない。
- ④ 生活者の抱えている不満を解消することに優先的に取り組んでいる。

問7 空欄 g に当てはまるものとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

13

- ① ともすると
- ② そうなると
- ③ 例えるとすれば
- ④ もつといえは

問8 本文の要旨として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

14

- ① 政治家、経営者は、未来を形づくるストーリーを利害関係者へ語り掛ける必要がある。
- ② 経営者は、最低水準で推移している政治や行政に依存するべきではない。
- ③ 一つの世も問題の本質は明らかなので、我々は未来を恐れる必要はない。
- ④ 物事には両面があるので、逆境のときこそチャンスだとリーダーは考えるべきである。

(以上)